## Ⅰ　教育課程の創造にあたり

### 1．研究主題の設定

今、教育の場において、社会の変化を見通しながら、これに対応できる人間の育成が求められている。また、心の教育、情報教育、環境教育、国際理解教育などの今日的課題や、2002年に完全実施される学校週五日制に対応できる教育課程の在り方が問われている。そんな中、私たちはこれまでの研究から、教科・道徳と総合学習の２つの方向からのアプローチは、大きな命題である「生きる力」を育んでいくときに有効であるという手応えを得た。

こうした社会の要請やこれまでの実践をふまえ、教科・道徳と総合学習、加えて特別活動をさらに充実したものにしていくときには、これまで以上にゆとりを持って、その内容と学習のあり方が系統的・発展的なものになるような教育課程を編成していくことが必要である。

教育課程を創造するにあたり、私達はまず、どんな子どもに育つことを願うのかというところから明らかにする必要があると考えた。そこで、これまでの研究のあゆみをもとにした子どもの現状、社会背景からみる課題をあげ、私達なりに検討をしながら「めざす子どもの姿」としてあげることにする。

**子どもに見られる現状**

○　知的好奇心や知識獲得意欲等が旺盛である

○　他からの情報を吸収しながら自己の想いをいろいろな形で表現できるようになってきた

○　結果としての知識・技能の量的豊富さにとらわれがちで　学びの過程そのものを楽しんでいない

○　学習対象を自ら見つけて　よりよく解決していく能力が育ちつつあるが　十分とはいえない

○　個人的な遊びが目立つようになり　よりよい仲間関係を築いていく上でトラブルが起きやすい

○　特別活動に対して　その瞬間を楽しむことができても　みんなで協力して活動を創造的・生産的に行っていく楽しさを味わう経験が少ない

**社会背景からみる課題**

○　国際化の進行にともなって、自文化理解や異文化理解のもと　共に手を携えて生きていくことが求められている

○　情報の氾濫のなかで　生活をより豊かにするための情報を的確に判断し選択する力が求められている

○　共生の精神にもとづき　性・福祉・人権などにかかわる正しい理解と実践力が求められている

○　身近な環境から地球規模の環境にいたるまでの課題に対する　よりよい考え方にもとづいた実践力が求められている

○　激しく変化する社会の中では　新しいものやことを生み出すといった創造的な資質や能力が求められている

このような現状や課題から、実に多くのことが子どもに求められている。

しかし子どもの側からすると、それらは見えにくいものであり、向かうべき目的とはなりにくい。したがって、直接そのようなゴールに向かわせようとすると、無理が生じ、強引に引っ張られてしまうような学習となってしまうであろう。目的を達成させようとしているにもかかわらず、そこから逸れていってしまうことになるのである。そうすると、学習が知識の量を増やすことに過ぎなかったり、伝達されただけで新たな行動を引き起こす原動力とならない価値観の獲得で終わってしまったりする。

学ぶ主体者は子どもである。子どもにとってのゴールは、子どもが学びがいや学ぶ必要性を感じて取り組み、学ぶことに意味を見い出しながら個性を生かし、学び方や問題解決などの資質や

能力の高まりを感じとっていくことと考えている。私達はそのようなゴールに向かって行くことができる子どもを、「自己の学びを広げ深める子」ととらえ、教育課程を創造していく上でのめざす子どもの姿とした。

そこで、次のように研究主題を掲げて研究を進めることにした。

**研究主題**

# 教育課程の創造

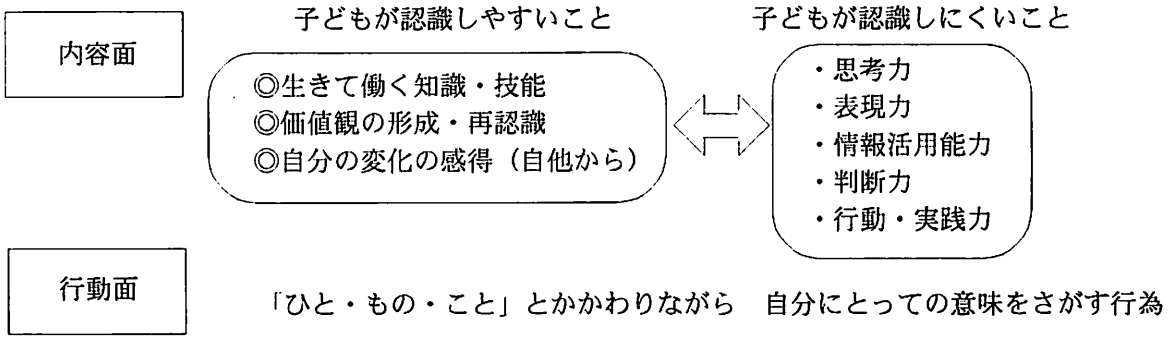
## ― 自己の学びを広げ深める子を求めて ―

### 2 自己の学びを広げ深めるについて

私たちは、「自己の学びを広げ深める」を、次のように考えた。

これからの時代においては、生涯にわたって、より一層自分を見つめて他と共に手を携えながら自分らしく生きていくことが大切となってくるであろう。自分らしく生きていくとは、単なるわがままに生きることではなく、自分を取り巻く「ひと・もの・こと」に対して、見識を持って判断し働きかけていくことである。そして、それは、「新たな自分、自信の持てる自分を創り出していくこと」の中にこそ生まれてくると考えている。また、働きかけていく「ひと・もの・こと」が価値のある対象であれば、意欲的に自分から関わろうとするであろうし、その過程や結果において変容に広がり深まりがより期待できる。

それでは、「新たな自分、自信の持てる自分を創り出していくこと」とは、具体的にはどういうことだろうか。私たちは、それを以下のような内容面を獲得していくことであり、同じく行動面を自立的にしていくこととととらえている。なお、内容面については、子どもがそれを認識しやすいことと認識しにくいこととの２面で考えたい。




以上のことから、「自己の学びを広げ深める」とは

> ひと・もの・ことに関わりながら、新たな自分、自信の持てる自分を自らの活動を通して創っていくこと

ととらえ、これが生きる力を育むことにつながると考えた。

### 3 ３つの学びの場で自己の学びを広げ深めることについて

自己の学びを広げ深める子を、大きな３つの学びの場を通して育んでいくことにした。３つの学びの場とは「教科・道徳」「総合学習」「特別活動」である。（くわしくは、Ⅱ章３(2)以降で述べる。）

これを実現するために、教育課程全般を見直すことにした。その中で生まれてくると考えられるゆとりを生かし、子どもの姿を明らかにしながらよりよい学習構想に改善していくことが自己の学びを広げ深める子を育んでいくことにつながると考えた。

そこで、そのような学習を構想していく上で、

・自らの活動をうながすゆとりを大切にする

・一人一人の活動（姿）を見てとり　生かす

の２点を考慮しながら、３つの学びの場で「自己の学びを広げ深める子」に迫っていくことにした。

次に、３つの学びの場における「自己の学びを広げ深める」を、それぞれ具体化する。

### (1)　主に教科・道徳において

激しい変化が予想されるこれからの社会では、身につけた知識や技能のどれだけかは過去のものとなり価値を低下させていくであろう。しかし一方で、変わらずに価値を持ち続けるものがある。私たちは今一度、各教科・道徳の本質をもとに、今の生活において、あるいは今後の生活において、その基盤となったりよりどころとなったりする価値あることは何かを吟味していく必要がある。

教科・道徳では、その価値あることを基礎・基本ととらえ、それをしっかり身につけた子になってほしいと考えた。

基礎・基本をしっかり身につけるとは、先の教科等における基礎・基本を教えてもらうのだということではなく、自らが獲得していくのだという自立的・自発的な学びである。そのようになるには、指導すべきことは指導する姿勢を大切にしながらも、結果として身についた内容に加え、どのような過程をふんだかということをも含んでのトータルな学びが大切にされなければならないであろう。

そこで、教科・道徳におけるめざす子どもの具体的姿を「各教科の本質に基づく基礎・基本を自らしっかり身につけていく子」として、「自己の学びを広げ深めること」を以下のようにとらえた。

本質にもとづく基礎・基本を自らの活動を通して身につけ、
新たな自分、自信の持てる自分を創っていくこと

### (2)　主に総合学習において

変化が激しくなりつつある社会には、これまでの教科学習の中での扱いは難しいが、問題意識を持って取り組まなければならない今日的課題が出てきた。例えば、環境に関わること、国際理解に関わること、情報化社会に関わること、福祉・人権に関わることなどである。それらから目を背けず、それらに対して、自分はどう考え、どうあればよいのかということを自分に問いかける場が必要であろう。

価値観は多様化したといわれているが、よりよい社会を築く、よりよい人間関係を築くということは普遍の善である。「よりよく」という方向性を持ちながら、一人一人が自分の身近な社会や環境から何を感じ、自分はどう働きかけていくことがよいのだろうかと考え、実践していけるような資質や能力を持った子どもになってほしいと考える。

今日的課題にかかわることから問題意識を持ち、それを追求する中で、必要な情報を収集したり活用したり、またそれを発信し交流したりしながら問題を解決していく力を伸ばしたり、自分の考えを深めたりしていく学びを子どもに求める必要がある。

そこで、総合学習におけるめざす子どもの具体的姿を「共に生きていく社会や環境に自らの活動を通して働きかけていく子」として、「自己の学びを広げ深めること」を以下のようにとらえた。

共に生きていく社会や環境を自らの活動を通して働きかけ、
新たな自分、自信の持てる自分を創っていくこと

### (3) 主に特別活動において

学校生活の中には、子どもが自分たちの問題を自分たちの力で解決したり、自分たちの楽しみのために自分たちでものをつくり上げていくことができる場が必要である。

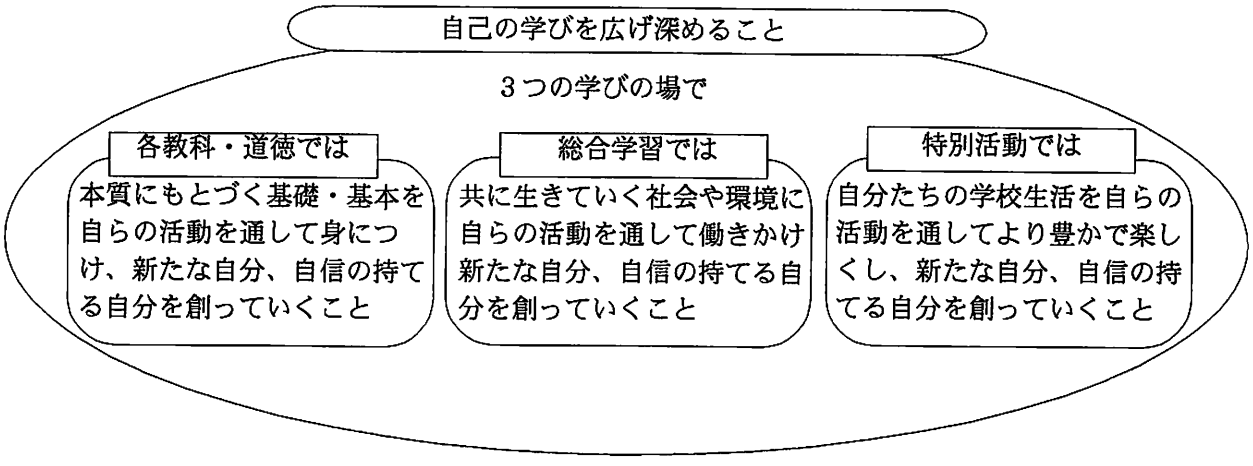
行事や集会的活動、あるいは学級独自における活動等においては、子どもが自分たちの学校生活をふりかえり、小さなことでもみんなで相談して解決したり、自分たちの発想を生かして、活動を楽しんでいく子どもになってほしいと考える。

活動のスタートや過程で、子ども一人一人が目的意識を持ち、それに向けて粘り強くあれこれ考えながら創造的に活動したり、仲間と共に生産的に活動したりしていく姿を求める必要がある。そのような姿が現れるようになるならば、子どもは自分達の学校、自分達の学校生活を一層豊かで楽しいものとして感じることができるようになるであろう。

そこで、特別活動における具体的姿を「自分たちの学校生活をより豊かで楽しくていく子」として、「自己の学びを広げ深めること」を以下のようにとらえた。

自分たちの学校生活を自らの活動を通してより豊かで楽しくし、
新たな自分、自信の持てる自分を創っていくこと

以上、３つの学びの場におけるめざす子どもの姿から、「自己の学びを広げ深めること」を述べてきた。これまでのことを簡単に表すと下図のようになる。




## Ⅱ　自己の学びを広げ深める子を育む教育課程をめざして

３つの学びの場から「自己の学びを広げ深める子」を育む教育課程を創造していくにあたって考えたことを以下に述べていく。

### １．教科・道徳において

#### (1) 基本的な方向性

①　教科・道徳における教育課程の創造にあたっては、教科・道徳の本質に基づく基礎・基本に照らしながら、年間計画として単元を構想し、そこに目標と展開の内容を明示していくことにする。

生活科については、それ自体が総合的な学習であることを鑑み、内容を見直すとともに、総合学習の各領域との関連を図りながらつくっていくことにする。

②　各教科で構想したそれぞれの単元で、基礎・基本を明らかにすることや学びを広げ深めるためにどうするのかということについては、本研究にいたるまでの各教科の実践をもとにして教科なりに実践検討していくことにする。

### (2) 年間計画をつくるにあたって

新しい年間計画をつくるにあたって、留意したことがある。一つは２００２年から完全実施されることが決定した学校五日制に対応できるものであること。もう一つは、「生きる力」の育成を目指し、「ゆとり」ある教育活動を展開する中で教科等の基礎・基本の充実や本校独自の総合学習の実践を可能にするものであることである。

これらを実現するには、従来から行われてきた学校活動全般（教育課程）をふり返る必要がある。中でも、今後の学校教育のあり方を大いに左右するであろう学習内容の捉え直しが重要な課題になる。その対応について考えると、現行の学習内容の見直しやいわゆる精選だけでは、従来の学習内容の吟味が中心になり対症療法的なものに陥り易く、今日的な課題への対応としては弱いものになり、「ゆとり」「生きる力」に対応した新しい年間計画を創り出すこともできない。そこで、学習内容を質、量ともに捉え直し、厳選することにした。

昨年度（研究1年次）では、特に教科・道徳における目指す子どもの姿の「各教科の本質に基づいた基礎・基本を自らしっかり身につけていく子」を中心に据えて取り組んできた。

１年次の厳選の基本的な考え方は、「現行の学習指導要領の学年目標を一年間で到達できること　総合学習を展開できることを前提とし、教科の本質、学習する内容の基礎・基本に基づき現行の内容を厳選する。」とした。

授業時数の削減については、厳選し授業時数が減っても学習のねらいは達成できることを前提とした。これについては先の教課審の最終答申の中でも大幅な時間数削減を含めた教育課程の弾力的運用について肯定し記されているので、その考えにたち実施方法を模索することにした。厳選の質的な面（学習内容そのもの）については教科に委ねたが、量的な面（厳選に伴う授業時数）については、総合学習まで視野に入れ十分なゆとりを生み出すために、各教科原則として年間一律約２０％（但し１、２年生は総合学習と生活科との関係から年間一律約１０％）の時間削減を基準にした。この考え方に従い、教科の特性や学習内容そのもののテーマ性を考慮し、大きく分けて下のような５つの視点で厳選に取り組むこととした。

① 学習内容の統合・合体
② 学習内容の圧縮・短縮
③ 学習内容の削除
④ 総合学習への移行
⑤ 行事、特活、課外への移行

新学習指導要領の公示にともない２年次は、その目標と内容を参考に各教科ごとに、教科の本質、学習内容の基礎・基本を改めて確認（詳細については後述の各教科の理論編参照のこと）した上で、１年次に作成した年間計画を見直し、新指導要領の主旨を生かし、厳選に取り組むことにした。時数については、新指導要領に準じることとし、２年間で内容の移行が完了することとした。以下は各教科が取り組んだ４つの方法である。

❶ 学習内容の統合・合体
❷ 学習内容の圧縮・短縮
❸ 学習内容の削除
❹ 内容の他学年への移行

## ２．総合学習において

ここでは、総合学習で大切にしたいことと、内容について述べる。

### (1) 総合学習で大切にしたいこと

子どもをとりまく社会は、これまで以上に急激な変化をしていくであろう。その中で子どもは他に流されることなく自分のよりどころをもとに考え行動していくことが求められる。そこで、総合学習では、子どもが画一的な価値基準を知識として認識していくことではなく、子ども一人一人が「自分はこうしたい」というはっきりとした意志を持ち、活動していく中で、取り上げた内容に内在する今日的課題にかかわっての、一人一人の価値観の形成や再認識を大切にしていき

たいと考える。
また、子どもが今日的課題にかかわっての事象に直接対峙することで、問題を見つけたり、情報を活用したり、自分で考えたことを行動したり、知らせたりすることができるであろう。その活動の中で自分で問題を解決していく力を伸ばしたり開発したりしていくことができると考えている。
それらの活動を通して、活動することに意味を感じ、他とよりよくかかわりながら主体的に取り組むことで、新しい自分のよさを感じとっていくことを大切にしたい。

**(2) 3領域・情報教育・英語活動について**

私たちは、これまでの研究の経緯から、総合学習をテーマ性のある内容で構成する3領域と主に自己表現力を高めるための活動としての特別領域（英語活動・情報教育）を設定し、実践することにした。

**・3領域**

総合学習では、Ⅰ章でのべた「共に生きていく社会や環境に自らの活動を通して働きかけ新たな自分、自信の持てる自分をつくっていくこと」にせまるため、教科では扱いにくい今日的課題性のあるテーマを主な内容と考えている。それは、これからの時代を生きていく子ども達に、よりよい地球環境や社会や人間関係を築くという意識を持たせることができるものである必要がある。そこで、人をとりまく「自然」「人」「社会や文化」にかかわることを取り上げることにした。その中で「共に生きる」という立場で、人と人とをとりまく対象がどのようにかかわっていけばよいのかを考えることや、相手の考えを尊重しながら自分の考えを正しく主張し行動していくことを大切にしたいと考え、「環境」「人間」「文化」の、3つの領域を設定した。詳しくは後の章で述べることとする。

**・情報教育、英語活動**

私たちが総合学習で大切にしたいと考えている社会の変化に対応できる力には、自己表現力（コミュニケーション能力　多様な表現力）や情報活用能力に関わる活動がある。これらは変化する社会においてぜひ慣れ親しんでおきたいことである。本校の特色でもあるネットワーク環境を生かしている情報教育と、ＥＡＡ（English Activity Asistant）と直接コミュニケーションをとりながらの英語活動を各学年に応じて、総合学習の時間内に配置することとした。
情報教育については、独自の時間としては、年間１２時間程度を当てることにした。また、英語活動については月１回年間１１時間を当てることにした。

**(3) 総合学習の単元を構想するにあたって**

ここでは、総合学習の単元を構想するにあたっての留意点について述べる。

**① 体験的活動を取り入れる**

前述したように、総合学習では画一的な価値基準を知識として認識させるのではなく、一人一人の今日的課題にかかわる価値観の形成や再認識をめざしている。
それは、一人一人の意志にもとづいた活動から生み出されたり変化したりするものである。そこで、活動自体が問題を解決する手段であり、それ自体が目的となる。そのような一人一人の意志にもとづいた活動は、先の見通しのもてる活動であり、一人一人にとって意味のある活動である。そのような活動は、これまでのように学校内で先生と子どものできる範囲でおさまるものばかりではないだろう。もっとアクティブで体験をより重視した活動（以下、「体験的活動」と呼ぶ）をも含めて考える必要がある。

**② 学びの個性化を推進する**

その体験的活動が効果的に行われるためには、子どもが解決したいと考える追求問題を規制しないことが大切である。また、たとえ追求する問題が同じであっても、それを解決していく方法に個性が発揮されるであろう。いわば、学びの個性化が大切にされる必要があるということである。

### ③　学びの個性化に合わせて学習環境を整備する

学びの個性化を推進するには、学習環境を整備する必要がある。追求する問題や追求方法の個性化に対応するためには、必要に応じてティーム・ティーチングでの教師の対応、専門性を持ったゲスト・ティーチャーや外国人などの人的環境の整備が必要と考えられる。時間、空間、施設設備などの物理的環境の整備は言うまでもない。これらの整備を行うことで、子ども達の体験的活動はより充実したものになると考えている。

これまで述べてきた総合学習の単元を構想するにあたっての留意点を整理すると次のようになる。

① 体験的活動を取り入れる
- 子どもにとって先を見通せるような活動
- 子どもにとって意味のある活動

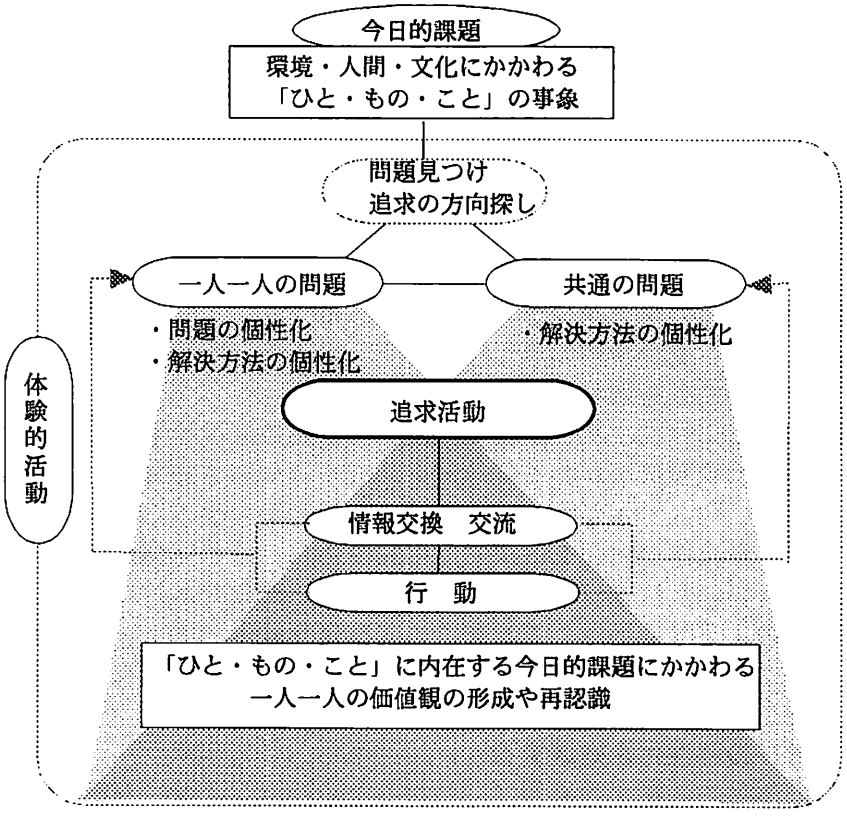
② 学びの個性化を推進する
- 追求する問題そのものの個性化
- 追求する問題を解決していく方法の個性化

③ 学びの個性化に合わせて学習環境を整備する
- 人的環境の整備　（T・T　専門家　外国人　など）
- 物理的環境の整備　（時間　空間　施設設備　など）
- 個々の子どもの表現を生かす学習形態

### (4) 総合学習の単元の構造

これまで述べてきたことを、単元の学習として構造化したものが下図である。

まず、子どもは、今日的課題につながるテーマで、環境・人間・文化にかかわる「ひと・もの・こと」の事象に出合い、問題を見つけたり、追求の方向を探しをする。その問題が一人一人の問題であったり、共通の問題であったりするが、一人一人の意志にもとづいた活動として追求されていく。一人一人、もしくはグループでの追求活動の中では、情報交換や新たな行動の場を保障していく。またT・T、専門家、外国人などの人的な環境や、時間、空間、施設設備などの物理的な環境が大いに利用されていく。そのような過程の中で、体験的活動を通しての追究がフィードバックされたり、さらに広め深められたりするのである。




総合学習の単元の構造

これらの活動を通して、先に挙げたさまざまな社会の変化に対応する力の伸長、開発が行われると考えている。

体験的活動の際には、時間的、空間的なゆとりにくわえて、子どもが教師も共に問題解決にあ

たっているという精神的なゆとりを感じることができるようにすることも大切である。また、単元の節目や終了時に、教師は、一人一人の子どもと話したり、子どもが表現したものから、子どもの考え方や活動の様子を見てとることにより、子どもに自分の変化を意識させていくことや次への見通しを持たせることに生かすことができると考えている。

そして、単元の終末では、「ひと・もの・こと」に内在する今日的課題にかかわってより深まった一人一人の価値観の形成や再認識がされると考えている。そのようにして形成されたり、再認識されたりした価値観がもとになり、単元を終えても実践が続いていくことを期待している。

１年次は、３領域で各学年３単元ずつ構想したが、時間の制約もあり、「自らの活動を通して働きかける」ための時間を十分に保障できないことがあった。そこで２年次は、総合学習で大切にしたいことに照らして、２単元に厳選し、実践することにした。

### ３．特別活動において

ここでは、特別活動で大切にしたいことと内容について述べる。

#### (1) 特別活動で大切にしたいこと

子どもの周りにはテレビゲームに代表されるように一人で楽しむものがあふれており、集団で協力して活動を創造的につくり楽しんだ経験が少ないように思われる。そこで、特別活動では、与えられたものやことをそのまま甘受するのではなく、一人一人の意思を尊重しながら子どもが考えていることをできる限り実現できる集団の練り上げの場となるようにしていきたい。

集団の中では、計画するときにも分担するときにも自分のことだけでなく他のことも考えなければならない。主張し合ったり譲り合ったりしながら互いの個性を尊重し合う態度を大切にしたい。また、協力して活動するときには、他からいわれたことをするだけではなく、主体的に取り組もうとする態度を大切にしたい。このような活動を通して、自分たちの考えたことを成し遂げながら自分たちの学校をより豊かで楽しくしていくことを願っている。

#### (2) 特別活動で取り上げる活動について

本校の子どもは居住地域が金沢市全域に広がっており、校内生活以外で子ども同士のつながりが薄い。そこで、特別活動の学級活動、児童会活動、クラブ活動、学校行事などの内容の中から、児童会活動を中心にして異学年たてわり小集団の活動（以下たてわり活動）を活用し、以下のような目標を掲げて、集団の練り上げのよさを味わわせることにした。

| |
|---|
| 高学年・・・集団で楽しめる企画を立てたり運営を進めたりする楽しさを味わう<br>中学年・・・集団の一員として協力して活動する楽しさを味わう<br>低学年・・・集団で活動する楽しさを味わう |

たてわり活動では、高学年が活動のリーダーの役割を果たすことが多い。学級や学年だけの中では、リーダーを体験することのなかった子どもがリーダーとなり、主体的に取り組むことや責任をもって取り組むことや我慢強く取り組むことの大切さを感じとることができる。また、互いに同じリーダーとしての活躍する様子を目にし、互いを再認識することができる。中学年や低学年は、年齢差のある集団の中でリーダーとして活躍する高学年を自分の目標とできるだろう。また自分たちだけではできないようなダイナミックな活動を経験することで成就感にひたり、自分の立場を考えながら取り組む中で協調していく楽しさを味わうことができると考えられる。

このようなたてわり活動と学級や学年の活動が連動することで、一人一人が自らの思いを表したり、自分の役割を自覚したり、互いを知り合うことができるであろう。

#### (3) たてわり活動について

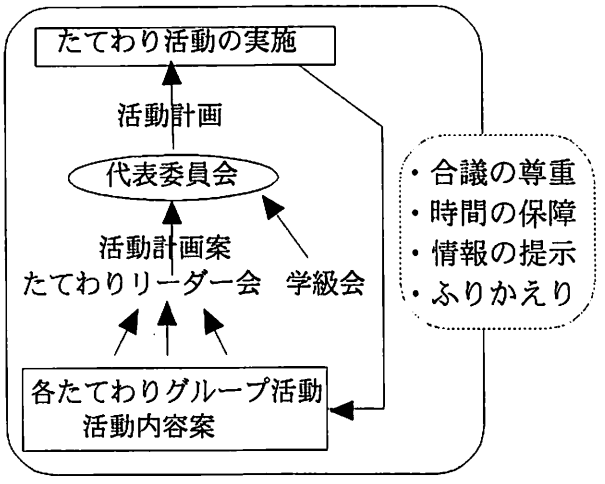
本校のこれまであったたてわり活動は、そうじのグループとしての面が強く自分たちの学校生活を楽しむという面が弱かった。また代表委員会から提案されたことを受け身的に行うところが

あった。そこで今年度は、子どもが自らつくり楽しむたてわり活動をめざし、グループの構成員数を半減し、すべての子どもが相互に関わりやすいようにした。そのとき私たち教師は、構成員の一人として参加し、子どもが考えているゴールまでの過程をわかりやすい状況にしていきたいと考えている。

具体的には以下のことに留意して構想していきたいと考えている。

①合議の尊重

時間や場所などの最低限の枠は必要となるが、子どもの主体的な取り組みを最大限認めたい。そのために、たてわりグループで低学年の意見も積極的に取り上げ、児童会の代表委員会に反映させたい。そこで、まずたてわりグループで集まり、活動内容の希望調査を行う。次にたてわりリーダー会で意見を集約し、活動案をつくる。それを代表委員会に提案し、討議によって決定することにしたい。その中で子どもが児童会行事の学期計画が作れるようになればいいと考えている。




**たてわり活動の計画から実施まで**

②時間の保障

子どもが自らの活動を、ゆとりをもって創り上げるための時間を保障し、子どもが考えているゴールまでの過程をわかりやすい状況にしていきたい。児童集会の時間やたてわりグループで行っている掃除の時間なども「たてわり活動の時間」とすることで、子ども同士のかかわりを深くし、学校生活を豊かに楽しむことを期待している。

③資料など情報の提示

参考になる前年度までの資料や他校の情報などを目にできるようにしたい。それによって、活動内容に工夫や広がりがうまれると考える。

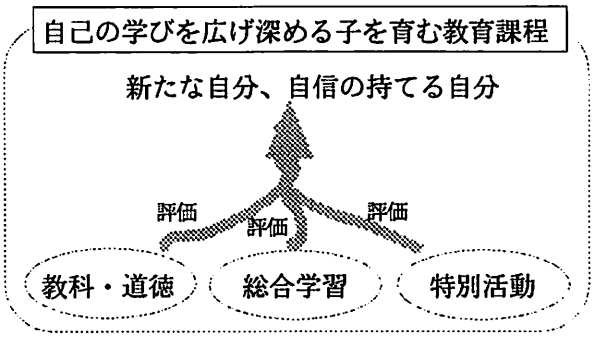
④ふりかえりの場の設定

活動後にはたてわりグループで話し合ったことを代表委員会に持ち寄ってふりかえる場を設けたい。これによって次への活動の意欲と見通しが持てるであろう。

## Ⅲ　よりよい教育課程にするために　　―　評価　―

私たちは、自己の学びを広げ深める子をめざして、教科・道徳、総合学習そして特別活動という３つの学びの場において実践を重ねてきた。Ⅰ章でも述べたように、自己の学びを広げ深めるとは、「ひと・もの・ことにかかわりながら新たな自分、自信の持てる自分を自らの活動を通して創っていくこと」ととらえ、子ども一人ひとりが以下のことを獲得しながら、しかも自分にとっての意味をさがす行為が自立的に行われることと考えている。

・生きて働く知識・技能
・価値観の形成・再認識
・自分の変化の感得




そのために、自らの活動をうながすゆとりを大切にすることと一人一人の活動（姿）を見てとり生かすことに留意しながら学習や活動を構想することにした。ここでは、これらが獲得されながら行われたかを、学びを広め深めるために行った働きかけの有効性を検証するという立場で、期待する子どもの様相が見られたかを子どもの表現内容や活動、自己評価、相互評価などを利用して評価していくことにしたい。

## 1　各教科・道徳において

教科・道徳では、単元構想の際に学びを広げ深めるために行う働きかけにかかわって具体的な子どもの活動や姿を洗い出し、各時限でその観点を明らかにしながら実際の子どもの活動や姿に照らして、授業評価し改善することにした。実際の子どもの活動や姿をとらえる方法には、子どもの発言や行動、記録などが上げられるが、各教科・道徳の特性に沿って行うこととした。

具体的に、６年生の理科の実践を例に上げて述べたい。

**(1)　単元名　炎を上げて燃えるもの**

**(2)　目　標**・物（植物体）が燃えるためには燃える物があることや空気の入れ替わりが必要なことや物が燃えるときは空気中の酸素が使われ二酸化炭素ができ物自体が質的に変化することを自分なりに追究し、「物が燃える」仕組みをとらえることができる。

・自分のこだわりを解決するための技能を習得することができる。また、自分の考えやイメージを表すことができる。

**(3)　本単元の基礎・基本について**

物が燃焼するとき、発する光や熱またはそれに伴って物の形態が変わることに目を奪われやすい。また昨今では、物を燃焼させた際に発生するダイオキシンが話題に上がっており、燃焼で発生する物を追いかけがちになろう。しかし、物自体も燃焼しながら質的変化をする。その変化とは物と空気中の酸素が熱によって激しく結びつき新たな物になるという変化である。それに伴って空気の組成も変化していることになる。熱を除けばこのような変化は特別なことではなく、身の回りによくある。「燃焼」は、物質が激しく酸素と結びつくという一種の酸化なのである。だから、ここでは「物は回りの酸素と結びつくと質的に変化する」という簡単な規則性をとらえることによって科学的な自然認識を深めることができると考えている。

本単元で「燃焼」にかかわる規則性の現れは、以下のような現象である。

「ろうそくはろう自体が燃えている」　→　炎に空洞部分があること、炎の中の空洞部分から取り出した煙が燃えること。

「物が空気中で燃えるときには、酸素が使われ二酸化炭素ができる」　→　酸素中で激しく燃焼すること、窒素中では全く燃えないこと、燃焼後の気体に石灰水を注ぐと白濁すること、燃焼前後での気体検知管の数値の差

このような「燃焼」にかかわる質的変化の現れを的確にとらえ自分なりの解決方法で追究できることとそれを調べるための技能を習得することが本単元の基礎基本となるだろう。

その技能としては、次のことである。

・マッチを用いての安全な燃焼実験の進め方
・ガスバーナーの使い方
・気体の捕集の仕方
・石灰水の使用目的と使用方法

これら、自分なりに「燃焼」を追究する過程においてとらえた現れの事実の積み重ねと他の方法や素材などでの確かめから得た事実、それらの事実と事実を結びつけて考える場によって、自らの活動を通して本質に迫っていくことができると考えた。そのために行った働きかけとめざす姿を明記し、自らの活動をうながすゆとりを取り入れた右のような単元構想をした。

**単元計画（総時数　13時間）**

| 主な活動と内容 | 学びを広げ深めるために |
|---|---|
| 1　ろうそくに火をつけ炎の様子を観察する<br>「物が燃える」とは　どんなことだろう | ①④ |
| 2　ろうそくは　ろう自体が燃えていることを調べる<br>・ろうそくの炎に金網を入れ　炎の内部の様子とそこから出る白い煙を観察する<br>・ろうが燃えていることを確かめる<br>・他の燃える物でも確かめる | ②④ |
| 3　物（ろうそく）が燃え（続ける）ためには　空気の入れ替えが必要であることを調べる<br>・ふたをした容器とふたをしない容器の中での燃え方を比較する<br>・容器の大きさの違いによる燃える時間の長短を比較する<br>・燃え続けるために容器を工夫し　空気の流れを調べる | ②③④ |
| 4　空気中で物が燃えるときには　酸素が使われ二酸化炭素ができることを調べる<br>・空気の組成を知る<br>・ろうそくを使って　窒素中　酸素中での燃え方を調べる<br>・石灰水や気体検知管を用いて　ろうそくが燃えると酸素が使われ　二酸化炭素に変化することを調べる<br>・ろうそく以外の物を空気中　酸素中で燃やし　石灰水を入れて変化を調べる<br>・他の燃える物でも確かめる | ①②③④ |
| 5　自分の学習をふりかえる<br>・燃焼について興味を持ったことを調べる | ②④ |

(4)　自己の学びを広げ深めるために

①　自分なりのこだわりを生かし　ゆとりある学習の構想に留意する

閉系での燃焼実験が容易なこと、空気の質的変化の調べやすさなどを考慮し、ろうそくを中心素材とする。ろうそくの炎をよく見たり、繰り返し試したり、アルコールランプなど他の素材でも確かめたりと納得するまで試行錯誤できるゆとりがあることを意識させておきたい。　→こだわりを持ち続ける姿

②　燃焼についてのこだわりを追究する場を保障する

本単元で扱う実験の多くが燃焼実験となる。そのため、安全面に配慮しながら、自由試行実験という形で時間を保障し、グループ再編や多様な素材を用意することで追究できる場を準備したい。それによって他の考えや事実を自分のこだわりに生かすことができると考えている。

→納得するまで調べる姿

③　ろうそくの燃焼についてのこだわり　を交流する場を設定する

自由試行実験での結果やそこから持ったこだわりをより高まったこだわりとするために交流の場が大切であると考えた。それぞれのイメージを図などを用いて交流し、燃焼についての事実が自分のこだわりの中でどう位置づいているのかはっきりさせることができると考えている。

→自分のこだわりを他と比べている姿

④　「燃焼」のイメージについて表現活動を行う

単元展開中の節目となる場でイメージ図や概念地図をかいていく。これによって、前節に書いた図と今節の図を比べ、変容を自覚できるようにしたい。　→以前を意識し今のこだわりを表す姿

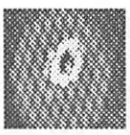
単元の実施にあたっては、これら自己の学びを広げ深めるために行なった働きかけに基づきながら時限を追って子どもの様子を分析していくことにした。

さらに具体的に、２／１３時の実践を例に述べる。

・本時の学習において

本時は、単元計画２に位置し、ろうそくはろう自体が燃えていることを調べる活動である。ここでは、②の働きかけを行ったので、それが有効に働いたかをめざす子どもの姿の現われで観ることにした。

**本時の展開**

| 主　な　活　動　と　内　容 |
|---|
| 1　前時の活動から予想を持って<br>炎の内部の様子を観察する<br>炎の中は空洞だ<br>炎の外側だけ明るい<br>  |
| 2　追究問題を持つ<br>どうして炎の内側と外側の燃え方がちがうのか？<br>予想される他の問題　中が空洞なのはどうして？<br>外側だけが明るいのは？<br>白いけむりの正体は？ |
| 3　予想し　それぞれに調べる<br>炎の内と外で温度が違う？　炎の内と外にある物が違う？<br> <br>炎の外は温度が高い　炎の内は白いけむりがある |
| ……本時はここまで…… |
| 4　各自の調べたことを交流する<br>5　イメージ図をかき　ふりかえる<br>ろうそくはろう自体が回りの空気と関係して燃えているらしい |

実際には、本時の活動に沿って次のような観点で行った。

観点１

**自分なりの疑問（追究したいこと）へと思いを膨らませているか**

- ○燃えている物への思いを膨らませている
- ○外側と内側の燃え方の違いへの思いを膨らませている
- ○空気との関わりへの思いを膨らませている

観点２

**自分なりの疑問（追究したいこと）に予想を持ち　検証方法や検証結果にいたるまでの見通しを持って調べているか**

- ○予想を調べている
- ○論理的に調べている
- ○結果から新たな予想を持ち調べている

この観点に沿って、本時での子どもの様子を考察する。

自分の問題を追求する

ろうそくの炎の内部の様子を観察することから、炎の内部に空洞のように見える部分がある事実から、「どうして炎の内側と外側の燃え方が違うのか」「炎の空洞には何もないのか」「白い煙りの正体は何か」などの疑問を各自が持った。その後、各自の持った疑問に予想を持って追究できるように各自の実験方法にそって材料や道具を準備したところ、予想をいろいろな方法で確かめたり、繰り返し調べたりしていた。②の燃焼についてのこだわりを追究する場を十分にしたことで、子どもは自分の持った疑問を納得するまで調べようとする姿が見られたといえる。

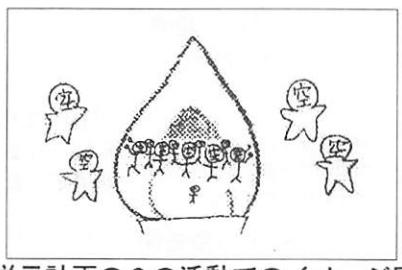
**・単元を通しての学習において**

同様に、自己の学びを広め深めるために行ってきた他の働きかけについて単元計画に沿って子どもの活動や姿や記録を見る。

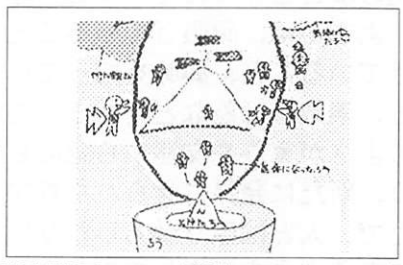
イメージ図で交流する

単元計画の３の活動では、それぞれがかいた炎のイメージ図をもとに、ものの燃える仕組みを説明した。そこで炎は「燃える材料」が必要であることがはっきりした。また、炎の外側が激しく燃えていることから、炎の周りの空気も燃えることに関係しているのではないかという新たな疑問がでてきて、炎を上げて燃えるものと空気との関係を調べる活動に入った。このことから、③のろうそくの燃焼についてのこだわりを交流する場を設定することで、自分のこだわりを他と比較し、次への疑問を追究しようとする姿が見られたと考えられる。

単元計画の４の活動では、ものが燃えるときには酸素を含む新しい空気がいることを確かめたあとでろうそくの炎が燃えているイメージをかいた。単元計画の２の活動でかいたろうそくの炎が燃えているイメージと比べることで、ものが燃えるには、「燃える材料１（ろう）」と「燃える材料２（空気）」が必要なことが意識されていた。④「燃焼」のイメージを表現することで以前を意識し今のこだわりを表わす姿が見られたといえる。



単元計画の２の活動でのイメージ図


単元計画の４の活動でのイメージ図

単元計画２や４や５の活動では、ろうそくの炎で調べたことから、わりばしやアルコールなどろうそく以外のものを燃焼させたときの炎などについても、ものが燃えることというこだわりを持ち追究し続けていた。①のゆとりある学習構想に留意したことで、こだわりを持ち続ける姿が見られたと考えられる。

以上これまで述べてきたことから、単元を通して自己の学びを広げ深めるために行ってきた働きかけが、子どもが自らの活動を通して基礎・基本をしっかり身につけることに有効であったと言えると考えている。

## ２　総合学習において

総合学習でも、各教科・道徳と同様に単元構想の際に学びを広げ深めるために行う働きかけに関わって具体的な子どもの活動や姿を洗い出し、各時限で評価の観点を明らかにしながら実際の子どもの活動や姿に照らして、子どもの発言や行動、記録などから授業評価し改善していった。

具体的に、３年生の人間領域の実践を例に上げて述べたい。

**(1) 単元名**　みんななかま-part1-

**(2) 目　標**　・新しいクラスの仲間とお互いを紹介し合うという活動をしながら、自分のよさや友達のよさに気づき、自分と共に友達も認め大切にしようとする。

**(3) 学習材について**

本単元での価値観の形成と再認識を以下のように考えている。

本単元では、人間領域の視点として位置づけている「命」と「交流」の２つの内容を取り込んでいる。

ここでの「命」は、生命体としての自分の命を大切にしていく（守っていく）ということをめざしているのではない。自分をとりまく家族や友達とのかかわりの中で、自分らしく生きることのきっかけづくりをめざしている。「交流」については、人は違うところや同じところがあり、そのなかで他を認め大切にしていくことをめざしている。

この時期の子どもは、自分を他との関係で見つめるようになってくる。それは自然なことであるが、ややもすれば、社会環境や家族の期待等から、自分を画一的な見方でしか図れなくなってしまう危険性がある。そうなれば、自分を他と同一化しようとすることで自分のよさを見失ってしまうであろう。友達に対しても、自分が持っている価値観でしか見ることができず、人としてのよりよい関係を築いていくことができにくくなると考えられる。

３年生は、クラス替えを経験し新鮮な気持ちでいる。そこで、自己紹介を足がかりにして、自分のよさや友達のよさを見つめていくことを扱う。よさとは、頑張っていること、続けていること、興味を持っていること、素敵な行為などである。これらのよさが家族や友達から認められたり、新たに発見させられたりすることで、人とは違うかもしれない自分にあるよさを肯定して自分らしく生きていくきっかけになったり、自分を見つめる素地つくりになると考えている。同時に、友達もそれぞれによさがあり大切にすべき存在であることに気づくであろう。この自信や気づきが生まれることで、先の「命」や「交流」で求めていることに迫ることができると考える。

このために行った働きかけとめざす姿を明記し、自らの活動をうながすゆとりを取り入れた次のような単元構想をした。

**単元計画（総時数８時限+課外）**

| 主な活動と内容 | 学びを広げ深めるために |
|---|---|
| 1　新しいクラスのなかまについて話し合う<br>友達がふえた　まだよく知らない人がいる<br>同じクラスだったけどよく知らない人もいる<br>みんなのことをもっとよく知り合おう<br>紹介しあおう　自己紹介<br>みんなで楽しめる会をつくって遊ぼう（特別活動に位置づける） | |
| 2　自己紹介の内容や仕方を考え　準備する<br>名前　趣味　自分の○……<br>がんばっていること　つづけていること　とくいなこと　など<br>自分で　家族に聞いて<br>OHP　実演　名刺　写真　画用紙　絵 | ①② |
| 3　自己紹介の会を開く（ワークショップ形式）<br>・自分の○を中心に扱う | ② |
| 4　友達の○を　見つける<br>自己紹介の○を詳しくして　自己紹介した内容にない友達の○を加えて<br>がんばっていること　つづけていること　よいところ　すてきな行動　など<br>自分で観察して　他の友達に聞いて　先生にたずねて　直接たずねて<br>見つけたことを紹介しやすいように　わかりやすく整理する | ①②③ |
| 6　友達の○を紹介する会を開く（ワークショップ形式） | ② |
| 7　活動をふり返る<br>自分のよさ　友達のよさについて　今後の活動etc. | |

### (4) 自己の学びを広げ深めるために

**① 自分や友達のよさを見つける体験的活動をゆとりを持って行う**

本単元の自己紹介は、自分のよさに気づいたり自分を見つめるきっかけづくりをめざしている。したがって、自分のよさを、得意なことや続けていることから紹介する活動で終わるのではなく、時間的ゆとりを持ち、自分では見えにくいよさも認識していくことができるように家族と対話することも取り入れたいと考える。また、友達のよさを見つける活動においても、より多くの人からより具体的なよさを聞き出せるように時間的なゆとりを持った活動を取り入れたい。

**→いろいろな情報を収集する姿**

**② 自己紹介や友達のよさを見つける活動に自分らしさが出せるようにする**

自己紹介をする際は、一人一人が全員の前で行うのではなく、ワークショップ形式を用いる。そこでは、単に紙に書いたプロフィールを読み上げるということではなく、個性ある紹介になるようにしていきたい。実物を見せたり実演したり、目で見て分かるようにいろいろ工夫できるようにことばかけをしていく必要がある。また、友達のよさを見つける活動では、よさが抽象的なことばで終わるのではなく、友達らしさが分かるような具体性のあることばとなるようにしていきたい。

**→自分なりの表現方法で表現する姿**

**③ 友達のよさを見つける活動で多くの情報を集めやすいようにする**

より多くの情報を集めるために、誰に聞いたらよいのかが分かるようにする。自分のクラスの友達だけではなく、１、２年生の時の担任の先生や現在関わっている先生にも気軽にたずねられる環境づくりをしていきたい。また、現在クラスが違う友達であってもたずねやすくなるように、学年で同一時間にしてオープンスペースを活用することも考えていく必要がある。

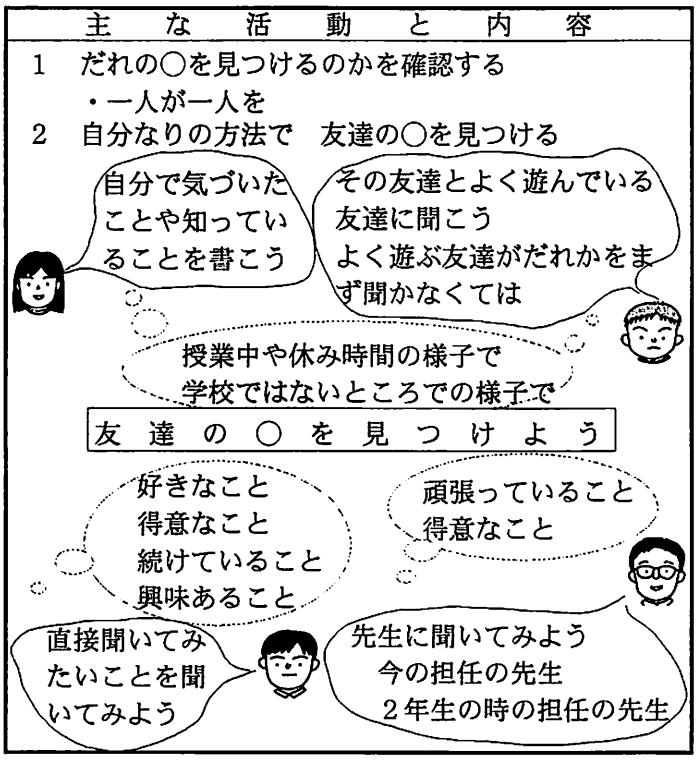
**→ひととよりよくコミュニケートする姿**

単元の実施にあたっては、これら自己の学びを広げ深めるために行なった働きかけに基づきながら時限を追って子どもの様子を分析していくことにした。それでは６／８時においてさらに具体的に述べる。

**・本時の活動において**

本時は、単元計画４の活動の友達のよさ（得意なこと　頑張っていること　素敵な行動など）を、自分なりの方法で調べる活動である。ここでは、①の働きかけを行ったので、それが有効に働いたかをめざす子どもの姿の現われで観ることにした。

**本時の展開**




実際には、本時の活動に沿って次のような観点で行った。

**自分なりの方法で友達の○を見つけているか**

- ・自分なりの方法を持っているか
- ・方法にしたがって活動できているか
- ・具体的な○を見つけようとしているか
- ・人とのコミュニケーションがうまく取れているか

本時では、○を見つける対象を少なくし活動に十分な時間をとるようにした。子どもは、見つけることになった友達に直接聞いたり、いつもいっしょに遊んでいるような子ども数人にたずねたりしながら友達の○をどんどん見つけていた。その中で、うまくいっていない子どもも見受けられたの

で、「友達の○の見つけ方が分からない子どもには、相談しながらその方法をアドバイスする」「友達の○を抽象的にしかとらえていない子どもには、事実をあげて具体的にするようにアドバイスする」という教師の働きかけがなされ、子どもは友達のいろいろな情報を収集する姿が見られた。よって有効であったと言える。

**・単元を通しての学習において**

自己の学びを広め深めるために行ってきた他の働きかけについて単元計画に沿って活動や姿や記録を見る。

単元計画の３の活動では、一人一人が自分の得意なことやがんばっていることなどをワークショップ形式で紹介し合った。実物を持ってきたり、紹介カードで紹介したり、様々な姿が見られた。表現方法を工夫したショップに友達がたくさん集まることを知った子どもは、単元計画６の友達の○を紹介する活動で他のよさを取り入れながら自分の表現に生かしていた。また、ショップに行った子どもはただ見たり聞いたりするだけでなく、ショップを開いた子どもにたずねる姿やほめる姿が見られた。②の働きかけである自己紹介や友達のよさを見つける活動に自分らしさが出せるようにワークショップ形式を用いたことで、自分なりの表現方法がより工夫された姿といえるだろう。

**自分の○を交流する**

単元計画４の活動では、友達のよさ（がんばっていること、続けていること、得意なこと、すてきな行動など）を直接本人にたずねるだけでなく、よく遊ぶ友達や先生にたずねる姿、休み時間にも他のクラスの子どもにたずねたりする姿が見られた。その活動を通して、自分が調べる友達の○だけでなく、まだよく知らなかった友達の○にも触れていくよい機会となった。働きかけの③として友達のよさを見つける活動で、多くの情報を集めやすいようにすることで、人とよりよくコミュニケートする姿が見られたといってよいだろう。

**他の人の○をたずねる**

単元計画終了時に、この活動を年間を通じて機会あるごとにあるいは友達のよさを見つけるごとに取り扱っていくことになった。休み時間や行事など学校生活を通して気づいてきた友達の○を以下のように日記に書いている姿が見られた。

| Mさんの○ | Sさんの○ |
|---|---|
| あゆみをいっしょうけんめい書いている。それに休み時間はハイパーレスキューになるれん習をしている。 | 国語や算数などで、意見や答えなど、いつも元気よく言うところがSさんの○。 |

以上これまで述べてきたことから、単元を通して自己の学びを広げ深めるために行ってきた働きかけが、子どもが自らの活動を通して共に生きていく社会や環境に働きかけることに有効であったといってよいと考えている。

**３　特別活動において**

私たちは、特別活動を通して自己の学びを広げ深めるとは、「自分たちの学校生活を自らの活動を通してより豊かで楽しくし、新たな自分、自信の持てる自分を創っていくこと」ととらえ、子どもが自分たちのゴールをめざして自主的に活動しながら集団で練り上げることを大切に考えている。そこで、たてわり活動で「自主的な活動がなされたか」「集団の練り上げがなされた

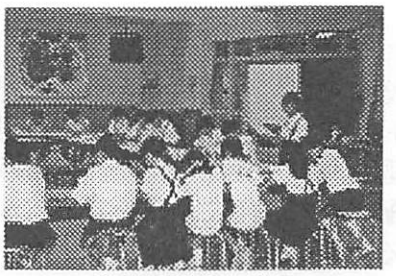
か」を評価したい。そのために私たちが大切にしたことは、・合議の尊重　・時間の保障　・資料など情報の提示　・ふりかえりの場の設定の４点である。これら、活動全般にわたって留意してきたことが有効に働いたかは子どもの活動の様子や記録で評価していきたい。

具体的に１学期のたてわり活動をふりかえってみる。

| | | |
|---|---|---|
| ５月 | １日 | ミニたてわり集会（発足会　アイディア募集） |
| | ７日 | たてわりリーダー会（活動候補の決定） |
| | １５日 | 代表委員会（１学期のたてわり活動決定） |
| ６月 | １日 | たてわりリーダー会（実行委員決定） |
| | ５日 | 実行委員会（実行計画案の作成） |
| | ７日 | 代表委員会（実行計画案の審議） |
| | １０日 | たてわりリーダー会（役割の分担） |
| | １１日～ | 各係ごとに仕事を進める |
| | ２４日 | ミニたてわり集会（めあてや服装・持ち物などの連絡） |
| | ２５日 | 実行委員会（最終確認） |
| | ２９日 | 野田山オリエンテーリング（雨天のため７月５日に延期） |
| ７月 | ８日 | 代表委員会（ふりかえり） |

今日のたてわり発足集会では、みんな楽しそうにしていてとってもよかったです。１～６年生全員がみんな仲良くハンカチ落としやステレオゲームなどしながら、他学年ともワイワイガヤガヤおしゃべりもはずみ、これからのたてわり活動がますます楽しみになってきました。

６年リーダー・N子

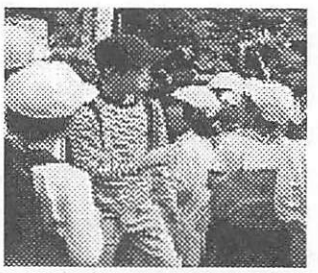


代表委員会の様子

この日記は５月１日のミニたてわり集会のものである。これまでのたてわり集会では役割を決めたり連絡をしたり運営がうまく行くための会であることが多かったが、この会のめあては「①今年度のたてわり活動について、アイディアや意見を出し合う」「②遊びやゲームを通して、メンバーが仲良くなる」であり１時間を自分たちの使いたいように使うことができた。たてわりグループでめあての①を終えるとグランドに出てなかよく遊ぶ姿が見られた。また、リーダーは「～をしなくては」「～をさせないといけない」という意識から「～をみんなでしたいなぁ」という主体的な意識を持ち始めていた。

・・・みんなで考えて問題をといていきました。運動会の時よりも、倍仲良くなりました。みんなが「楽しかった」と言ってくれて、本当に実行委員になってよかったと思いました。今は満足して　います。また、やってみたいです。

実行委員・T子



野田山オリエンテーリング

これは７月５日の野田山オリエンテーリング後に書かれたものである。T子はこれまでリーダーをしたり実行委員など経験したことがなかったが、自分たちの考えたことができ、それをみんなが楽しんでいたことから次への意欲を持ったと言えるであろう。

これら子どもの姿や活動から、たてわり活動が、自主的になされ、集団の練り上げが有効に働いていたと言えるであろう。

このように３つの学びの場でめざす子どもの姿が見られたかを検証しながら、教育課程を創造していく姿勢を大切にしたいと考えている。

## Ⅳ　成果と今後の課題

私たちは「自己の学びを広げ深める子」に育っていくことを求めて研究主題「教育課程の創造」を掲げ、２年間にわたって研究を積み重ねてきた。ここで、研究の成果と課題について簡単にまとめておきたい。

### １　教科・道徳において

私たちは、「自己の学びを広げ深める子」をめざして、教科道徳では自己の学びを広げ深めることを「教科の本質にもとづく基礎・基本の内容を自らの活動を通して身につけ、新たな自分、自信の持てる自分を創っていくこと」ととらえ、各教科の基礎・基本を明らかにするところから研究を始めた。そして、目標や展開の内容を検討し、年間計画として位置づけた。

それを実践しながら、現行指導要領に基づく内容を２割厳選する方法を明らかにすることができた。新指導要領の公示にともない２年間の移行措置を行う際にも、基礎・基本に照らして内容を見直し、年間計画を構想する際の足場をつくることができた。

また、各教科・道徳の本質に基づく基礎基本を自らしっかり身につけていく過程で、自らの活動をうながすゆとりと、一人一人の活動を見て取り生かすことに配慮して、場の設定や活動の設定や工夫という働きかけを行いながら単元を構想することで学びを広げ深める子に迫ることができた。

### ２　総合学習において

総合学習に年間１０５時間を配置して、年間指導計画を構想してきた。「環境」「人間」「文化」という３領域では今日的課題性のあるテーマにつながる単元を構想し、年間指導計画を立てて取り組んできた。また、英語活動、情報教育には、１０５時間のうち、それぞれ１１時間程度を配当して、年間計画を立てて取り組んできた。単元を構想する際には、・体験的活動を取り入れる・学びの個性化を推進する　・学びの個性化に合わせて学習環境を整備することに留意してきた。

これらの実践から、年間に今日的課題性のあるテーマにつながる内容を系統的に計画し配置することと上記の３点に留意することで、子どもの価値観の形成や再認識することにつながった。

今後は、学校近辺の地域と子どもの居住地域が別であるという本校の独自性を加味しながら、学校近辺の地域により目を向けた内容の検討が必要であると考えられる。

### ３　特別活動において

異学年たてわり小集団においては、たてわり集会で意欲的に出された低学年の意見や子どもが自分のやりたい活動を代表委員会で練り上げながら計画することができた。またいくつかの活動を通して学年を超えたよりよい人間関係が育む姿が見られた。

この実践を通して子どもたちが自分達のゴールを目指して自主的に活動しながら集団で練り上げていく上で・合議の尊重　・時間の保障　・資料など情報の提示　・ふりかえりの場の設定の４点が有効であることが明らかになった。それよって、自分たちの学校生活を自らの活動を通してより豊かで楽しくしようとすることができた。これらの成果を特別活動の他の内容にも生かしていきたい。

これまでの２年間の研究はささやかなものではあるが、これら３つの学びの場から「自己の学びを広げ深めること」ができ、来る2002年の学校週五日制の完全実施と新指導要領の実施にともなう本校の新しい教育課程の基礎作りができたと考えている。今後も子どもの姿や子どもをとりまく社会の状況によって、３つの学びの場における年間計画にある目標や内容、それらの年間配置を検討しながら、さらに本校の独自性のある教育課程としていきたい。

～参考文献～

「総合的学習をつくる」　吉田貞介、黒上晴夫（日本文教出版）
「実践クロスカリキュラム」　高階　怜治（図書文化）
「教育の本質」　鵜川　昇、河合　隼雄（プレジデント社）
「総合学習のすすめ」　村川　雅弘（三晃書房）
「総合学習の理論」　高浦　勝義（黎明書房）
「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について」平成8年　文部省
「教育研究」1997年7月　52巻7号　初等教育研究会
「初等教育資料」平成10年5月号（No. 685）文部省小学校課、幼稚園課編集
「金沢大学教育学部附属小学校研究紀要　第19集から51集」